

ばらんす

第22号

編集発行

大田原市企画部企画政策課
男女共同参画係
〒324-8641
大田原市本町1丁目4番1号
☎ 0287-23-8701
FAX 0287-23-8748

一人ひとりが輝く大田原のつどい

考えよう! 女と男の生き方を

1月20日(土)大田原ピアートホールにおいて『一人ひとりが輝く大田原のつどい』が開催されました。



報告会風景

第1部は第5回大田原市女性の海外研修派遣団10名による、フランス・ベルギーでの研修報告、第2部はコーディネーターに松田朋恵さん(フリーアナウンサー)、パネラーに日原悠子さん(陶芸家)・藤田幸秀さん(保育士)・黒崎頼子さん(看護師)をむかえ、“一人ひとりが輝いて生きるために”のテーマで、パネルディスカッションがありました。



コーディネーターの松田朋恵さん



パネラーの日原さん・藤田さん・黒崎さん

アンケートから

第1部へは、●ベルギーでのゴミ焼却(野焼き)に罰金制度があるのに驚いた。●是非スイスの教育・福祉・ゴミ処理等に関してみてきてほしい。等の意見がありました。

第2部へは、●育児・介護等身近な問題を、分野の違う立場で実際に活躍する話に、分かりやすく参考になった。●古い慣習にとらわれず、自分達の考え方で生きていくことの大切さを知った。等、大変多くの意見が寄せられました。

つどい全体に対しては、●初めて参加。せっかくの休みなのに……と最初は気が進まなかったが、今は来てよかった。●男性の参加者が少ないのは残念。等の意見もありました。

つどい参加者数491名(男性87名・女性404名)

ばらんす の名の由来…「バランス」のとれた社会を目指し、これからは「素敵に輝かしく生きたい」ということを願い『ばらんす』と名付けました。

特産パンの開発

広い駐車場が脇にある、山の手一丁目の「アブラヤパン店」を訪ねると、明るい店内に色とりどりのパンが並んでいる中で、キリリとしたコックコート姿の菊地久美子さん(24)が迎えてくれました。

「ブレーン」「唐辛子チヨリソーパン」「えびちり唐辛子パン」の三種類を昨年11月から販売しています。今も新しいパンを試作中とのことですよ。



お友達に勧められて入った「大田原だね！つと」のブログで「大田原特産の唐辛子を使った食品がいろいろ出ているが、唐辛子入りパンを売り出してはどうか」との話から、このパンを開発することを思いついたそうです。「辛さに対する好みは個人により千差万別で、この辛さに決めるまでには、試行錯誤を繰り返して、大勢の人に試食してもらい、ずいぶん時間がかかりました」と語る久美子さん。後ろで両親がうなずく、その間にもパンを求めてお客さんが来る。店には活気が溢れていました。



開発中の試作品

◆ファミリアーナ店◆

あたたかくやさしい感じのお父さん、明るいお母さん、聡明で美しい久美子さん、家族三人で働いているお店には、早春のあたたかい日差しがいっぱい差し込みファミリアーナの優しさが溢れています。「人寄せがすきな父と母のお陰で、きょうだいや親戚がいっぱい居るようだしあわせです」と久美子さんがおっしゃるように、ここには人を引きつける魅力があります。

「親切な人が多く、街中が大きな家族のような感じで、そんなこの街がすきです。これからもうずっとこの街で仕事を続けていきたいと思っています」

◆望む家族像◆



そつという彼女は、子どもの頃から家業を継ぐつもりで育ち、大田原女子高を卒業すると、パンの専門学校へ進み、その後横浜のパン店で修行をして今、家業を継いでいるという頼もしいお嬢さんです。お母さんは「久美子にお嬢さんが居てくれれば」とおっしゃいます。ただいま花婿募集中のこと……。

目指す家庭像は、「努力を惜しまず、上を目指すと一緒に、肩を並べて進んでいきたい」と、おっしゃいます。

老舗の「アブラヤパン店」は、久美子さんで四代目になります。地域に根ざし、地域を支えるこんなお店のあることを力強く感じました。

(大久保記)

男女共同参画講座終了

平成18年度の市主催の男女共同参画講座(全6回)が41名の受講生で7月から11月まで市総合文化会館で開催されました。

第1・2回：国際医療福祉大学総合教育センター講師 小林真理子さん
講話 “心理学で自分探しをしてみませんか！”

第3回：フリーアナウンサーの広瀬久美子さん講演会 “男女がともに輝く社会を目指して”

第4回：弁護士の増井瑞穂さん講話 “知って徳する身近な法律”

第5回：とちぎ男女共同参画センター(パルティ)施設見学と事務局長さんの講話

第6回：母子自立支援員及び婦人相談員の藤田弘子さん講話 “～より良い人間関係を目指して～”

講座の参加者は、いろいろな講話を聞いて気づいたり、考えさせられたり、反省あり、納得したり、とてもよかったと感想を述べていました。

市では平成19年度も男女共同参画講座を予定しています。年令、性別を問わず講座に関心・興味をもつみなさんの参加を待っています。

シリーズ 輝

今回は、大田辛子を使った販売している菊さんと、日赤で看るかたわら、声リサイタルを開き幸子さんに登場

輝きを共に



井戸沼幸子さんは会社員である夫の秀雄さん（共に五十歳代）と余瀬に住んでいます。

幸子さんは、休日に地域のデイケアセンターや介護施設などを訪問し歌のボランティアをしています。

す。訪問先では、拍子を取ったり、知っている歌になると口ずさみながら聞いてくれます。「喜んでくださる姿を前にすると、感動し充実した気持ちになります」と、話されました。



（日本歌曲・才

ペラ）を開催しました。コンサートのチラシやポスターの作成、実施までの準備等を夫と息子さん達がやり、当日は四百人近い観客が集まりました。

井戸沼さん家族は終了後胸をなで下ろし、満足した様子でした。「今、自分が充実して生きることが出来るのは、職場の理解と知人・夫・家族の協力と支えがあるから」と、心から感謝をしていました。幸子さんの謙虚で温かい人柄がにじみ出ていました。

秀雄さんは息子さんが小さいときから育児や食事の手伝いをし、幸子さんの心身の支えとなつて下さったそうです。今でも秀雄さんは幸子さんの良きパートナーであり、最大の応援家（歌）です。妻が輝いていると自分も嬉しくなるこのことです。



幸子さんは大田原赤十字病院に勤務し、直接貴い命と向き合っている仕事をしています。その中で人は、与えられた日々を、お互いを尊重しあつて、輝いて生きることの大切さを強く感じているのではないのでしょうか。まさにご夫婦はお互いを支え合つて、共に輝いて生活しています。

（神立記）

男女共同参画全国都市会議 in うつのみや

テーマ：あなたとわたし ときめく未来へ 輝く個性

10/26.27「男女共同参画全国都市会議inうつのみや」が開催され、大田原市女性連協からは23名参加しました。10/26には、ジャーナリスト大宅映子氏の基調講演があり、一同感銘を受けました。輝くためにの大宅氏信条をお伝えします。

大宅映子氏講演

テーマ

どう輝いて生きるか

要旨

女だけが輝くのは無理である。個人が輝く生き方が出来るよう意見を出さない限り、何も変わらない。人間生まれた以上役割がある。スポットを浴びている人がいいのではない。自分の頭で考え、情報に振り回されない。



輝いて生きるための十箇条（大宅氏提唱）

- ①お仕着せから自己選択へ（自分で選ぶ）
- ②みんなちがっていい（みんな同じでなくていい）
- ③相対主義から絶対主義へ（みんな相対主義の日本）
- ④予防から体験主義
（子どもが歩き出すとけがをする。失敗から人間は学ぶ）
- ⑤完璧主義から大筋がよければOKにしよう。（完璧を求めない）
- ⑥減点主義から加点主義へ（よいことを取り上げ評価）
- ⑦一律主義からデコボコ主義へ
- ⑧平均主義から異論主義へ（勇気をもって異論を唱える）
- ⑨所有から利用へ（ものをみんなで利用する社会へ）
- ⑩数字からフィーリング
（数字にならないものの方が人にとっては大事なもの）

わがやの食卓から 「食育」を考えてみませんか!



平成17年6月10日、国会で食育基本法が成立し学校教育、企業あるいは行政機関を通し、さまざまな啓発活動が行われています。

毎日の生活の、当たり前の食事についてまで、なぜ法律に定めなくてはいけないのかとの思いがいたします。しかし、私たちを取り巻く「食」に関する安全、肥満・生活習慣病などによる医療費の高騰、孤食・個食（どちらもこしょく）など食を囲む家族団らんの崩壊、食材の海外依存による食の安全保障の問題、伝統ある食文化の崩壊等社会全体の問題として放置できなくなっています。

「食育」は耳新しい言葉に聴こえますが、かつて我が国の育児には食・体・知・才・徳の五つの育があり、そのなかで命を育むこととして「食育」が根幹とされてきました。家庭のなかで食卓が最も大事な行事とされ、家族が一堂に集まり命を食べる感謝の心で「いただきます」と合掌してきました。その食卓

のなかでご飯一粒の大切さ、偏食のいましめ、良く噛むこと、箸の使い方など食文化の基本を学んできました。そして、四季の折々に伝統食を通し地域の文化を学び、旬の食材から自然の豊かさを



学んできました。

しかし、高度経済成長期のころから、食卓から父親の姿が消え世界からエコノミックアニマルとも



呼ばれました。その後、女性の社会進出が増え、両親共働きという家族が当たり前になり、家族が顔を合わせてご飯を食べれる状況がなくなりました。

忙しい家族の食卓はスーパーの食品売り場が支えるようになりました。炊いたご飯から数々のお惣菜、お味噌汁まで並び『お袋の味』が無くなった家庭も少なくありません。

「食は命を支えるものだから人任せにはいけない」との古来からのいましめが崩れ、コンビニで各自が好きなものを買ってきて、それぞれテレビを見たり、新聞を読んだり、メールをしたりしながら勝手に食べる。そのような「個食」「孤食」の家庭が多くなっていると言われています。好きな物を食べ、栄養補給をサプリメントでおこなう。このような食事で心が満たされるでしょうか。家族の絆、誇りが築けるでしょうか……。

「食育」を我が家から、もう一度考えてみませんか。

読者のこえ

わが家は夫と子ども3人(小中学生)、それに両親の7人家族です。家事と自営の仕事の手伝い。毎日が多忙で心身が疲れきっていたとき、「ばらんす」21号を手に入れました。

そのなかでお互いに助け合い輝くご夫婦、男性、女性の領域と考えていた壁を乗り越えて輝く人たちが紹介されていました。これからの男女共同参画社会、わたしひとりでは抱え込まないで、家庭のことも夫の協力を得て支え合うことが大切なのではと気づきました。(K子 40代)



編集後記

車を運転するときよく感じるがあります。狭い道でのすれ違いや交差点を通過するときなど、お互いが「初心」を忘れず、「思いやり」の気持ちで運転をすれば気分もよく事故も減るのではと、それぞれ輝くためにはと考えたとき、こんなところにも「輝く」ための源があるのではないのでしょうか。

鈴木 章浩

編集委員 大久保愛子 神立 道子 栗原 敏子
(アイウエオ順) 鈴木 章浩 鈴木えい子 住吉すみ子
谷辺 範夫